

2024年3月24日

説教題「後で」ヨハネ福音書 13 章 36～14 章 3 節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは言われた。『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後について来ることになる。』(ヨハネによる福音書13章36節)

今朝一緒に読んだ場面は、主イエスが愛する弟子たちと最後の食卓を囲まれた場面の一部です。主イエスはこの夜のうちに逮捕され、真夜中に召集された最高議会で死刑判決を受け、翌朝には十字架刑に処されていくのですが、そのようにして世を去る「ご自分の時」が来たことを悟り、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれて」（13：1）、食卓を共にされたのでした。ここで「弟子たち」と訳されている言葉は、原文そのままに訳すと「自分の者たち」であり、「愛しぬく」は「最後まで」、つまり「十字架の受難と死の最後まで」という意味が込められた言葉です。つまり、主イエスの弟子とは「主イエスのもの」とされ、「十字架の受難と死にあらわされた真実の愛によって、愛し抜かれている者たち」なのです。それは「どんなものも、死も艱難も、弟子たちの恐れや裏切りでさえも、十字架にあらわされた主イエスの愛から、私たちを引き離すことはできない」ということを意味します。

この最後の食卓において主イエスは弟子たちの足を洗われた上で、ユダの裏切りを予告し、さらに一番弟子のペトロの離反も予告します。自分のことをユダヤ教の指導者たちに売り渡すと知っていて、あるいは「このイエスのことなど知らない」と言うことが分かっている、主イエスは弟子たちの足を洗われたのでした。当時、外の埃にまみれた客人の足を洗うのは、ユダヤ人奴隷ではなく、外国人奴隷がする最も賤しい仕事でした。ですからイエスと弟子たちのように奴隷をもたない者たちは自分の足は自分で洗ったのです。にも関わらず、その一番賤しい仕事をなぜ先生である主イエスがされるのか。その意味がペトロたちには分かりませんでした。戸惑うペトロに主イエスは語ります。「今はわたしのしていることが分からないだろうが、後で分かるようになる」と。そしてその次には、十字架で一人殺されていく自分を暗示しながら、「わたしの行く所に今は行くことができないが、後について来ることになる」とも語られたのでした。

今回、ここで二度も「後で」という言葉が重ねて語られていることに心がとまりました。この「後で」という言葉には、どういう意味が込められているのでしょうか。

一つには「今はわからないペトロ」「今はついていけないペトロ」の信仰の未熟さ、弱さを示している言葉といえるでしょう。ペトロは主イエスと一緒にいながらも、主イエスが見ているものを見ることができていないし、主イエスが祈っておられることもその闘いも知らない…ということです。主イエスは父なる神の御心を見つめ、葛藤

しながらも祈り、神から示された受難の道を見つめているのに対して、ペトロたちは自分たちの願い、計画、理想を見つめ、その実現を主イエスに期待していたのです。神さまを見つめていた主イエスに対して、ペトロはあくまでも人を見つめたい。それゆえに長い間一緒にいたのに、主イエスとペトロたちとは見ているものがまったく違っていただけでした。

ここでさらに深刻ことは、ペトロは自分たちの信仰の未熟さ、弱さに気づいていないということです。ペトロは最後まで主イエスに従い、必要なら命を捨てる覚悟でした。そのためにすべてを後ろにおいて従ってきた。そこに嘘はなかったと思います。しかしそこまで深い覚悟を持ちながらも、いざとなると逃げてしまう情けない自分の信仰であることに、この時までペトロは気づいていません。十字架を前に信仰を粉々に砕かれた時に、はじめてペトロは思い知るのです。「主イエスを理解できず、ついていくことのできない弱く、貧しく、未熟な自分」であり、「世の光として来てくださった主イエスを否定し、殺してしまう、恐ろしい闇を抱えた自分であること」を。

しかし同時にこの「後で」という言葉には「主イエスの真実な約束」が込められています。主イエスと同じ食卓を囲んでいたのは、そのように未熟で、弱く、貧しく、闇を抱えた弟子たちでしたけれども、主イエスはその彼らに「後で分かるようになる」「後でついて来れるようになる」と約束してくださったのです。たとえ十字架が主イエスと弟子たちとの間を引き裂いたとしても、「もうダメだ」「もう無理だ」と弟子たちが諦めてしまうことが起こったとしても、主イエスは弟子たちを「御自分のもの」として「十字架の死に至るまで愛する」、その愛を変えることはない！…という約束。その「主イエスの真実な約束」がこの「後で」の言葉には込められているのです。

実際、復活された主イエスは、暗い部屋に閉じこもっていた弟子たちの前に立ち、「聖霊を受けよ」と息を吹きかけ、未熟で、弱く、情けない彼らになお愛を注いでくださいました。つまり「後で」という言葉は、ペトロたちの信仰の未熟さ、弱さ、貧しさを示すと同時に、そのペトロたちを最後まで愛し続ける「主イエスの確かな約束」が示されている言葉なのです。

主イエスという方は、私たちと共に歩みながらも、一歩二歩先に行く方です。不信仰のゆえに、その主イエスにつまづき、ついて行けないことが起こっても、主イエスはその者たちを見捨ててしまわれません。必ず戻って来て「後で分かる」ように、「後でついて来れる」ようにして、主イエスのおられるところに一緒に居られるようにしてくださいる方なのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である」(14:6)。今日も未熟さと弱さと、そして何よりも闇を抱えた私たちを、神さまの道、真理、命に最後まで導き続けてくださる方に、しっかりと目を注いで従っていきたいのです。